

3. 森鷗外と「北游日乗」, 「北遊記」

—函館, 青森を中心として—

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学講座

1. 森鷗外研究と演者

弘前市で内科を開業していた父は、津軽地方の医学の歩みにも関心を持ち、1953年頃から森鷗外の史伝「渋江抽斎」を通じて津軽の医学史の研究を開始した。そして孔版ではあるが「渋江抽斎人名誌」¹⁾を1967年に上梓した。この著書は後に改訂されて津軽書房から出版された²⁾。この研究の過程で父は「渋江抽斎」に関係して鷗外が弘前の北辰日報の記者であった中村範に宛てた書簡6通を見出した。当時の鷗外全集に未収録のものであった。演者はこの間父の言いつけで各地の図書館などを訪問し資料の収集に協力した。抽斎の孫の渋江乙女氏が青森市浅虫に住んでいることを知ったのもこの頃であった。

演者は1961年の弘前大学医学部専門課程時から津軽の医学史、疾病史の研究を始めたが、鷗外の史伝「渋江抽斎」がこの方面の入門書として大変重要であると考えた。例えば「その五十五」³⁾に出てくる「直舎伝記抄」であるが、これは抽斎の編になる弘前藩江戸屋敷の宿直医官の日誌である。抽斎がどのような目的をもってこの「直舎伝記抄」を編むに至ったかは全くの謎であるが、少なくとも抽斎が弘前藩の医学の歩みに関して何か著作を計画していたことだけは言えるのではないかと思う。現在のところ原本とも言うべき宿直医官の日誌は1冊も遺されていないし、全国的に江戸時代の藩の宿直医官日誌が遺されているという話も聴いたことはない。この意味で「直舎伝記抄」は医学史的に見ても極めて貴重な史料と考えられる。

この「直舎伝記抄」によってそれまで全く伝が

不詳であった弘前藩江戸定府の医官桐山正哲(きりやましょうてつ)の事績も明らかになった。桐山は杉田玄白が「解体新書」を翻訳した時の仲間の一人であったが、本草学に詳しく弘前藩江戸屋敷で本草学の講書を行っていることが明らかになった。「直舎伝記抄」は富士川游が所蔵し、それを鷗外が借覧したのであったが、借覧したのは都合8冊であった。しかし演者が調査した時点で慶応大学医学部北里記念図書館(信濃町メディアセンター)に現存するのは小型本の6冊であった。いまだ残り2冊の所在は不明である。図書館の目録には「直舎伝記抄」とのみ記されて、抽斎の名が記載されていないが、恐らく残りの2冊は大きさも異なるので別に分類され、書名、編者名不詳の書として扱われているのとも考えられる。

演者は1985年5月に第86回日本医史学会を弘前市で開催したが、それを記念して「渋江抽斎の研究」⁴⁾と「直舎伝記抄」⁵⁾を出版した。前者は渋江抽斎自筆の「医学館講書一件記録」, 「医学館講書被仰付御留守居方留書」を翻刻したものである。「直舎伝記抄」調査の過程で渋江乙女氏宅に上記の二写本が秘蔵されていることを知り、乙女氏に懇願し漸く許可を得て出版したものであった。この史料によって天保15年3月抽斎が幕府医学館の講師に任ぜられた経緯が詳細に知られた。しかしどうした訳か渋江保(抽斎の嗣子、乙女氏の父)はこの史料を秘して鷗外にさえ見せなかった形跡がある。この写本自体のことや講師就任時に多額の借金をしていることなどの逸話が「渋江抽斎」には全く披見されないからである。乙女氏も演者に「これまでだれにもこの写本を筆写させたことはありません」と断言していること

も見逃すことは出来ない。

演者はその後も鋭意渋江抽斎と鷗外の作品の「渋江抽斎」の研究を進め、1988年に保氏が鷗外に提出した「抽斎親戚並門人」に加えて、渋江保の日記（明治元～3年）を新たに発掘して活字化翻刻し研究機関、研究者に配布した⁶⁾。保の日記によって維新の混乱時に抽斎没後の渋江一家が江戸から弘前へ引き揚げた日時、経路などの詳細が知られた⁷⁾。また渋江抽斎は弘前藩の秘薬「津軽一粒金丹」の製造を許された数少ない藩医の一人であったので、この関係の史料を鋭意探索した結果、抽斎自筆の秘伝書と渋江家で用いていた「津軽一粒金丹」の薬袋を発見した⁸⁾。秘伝書は伝授された者が次ぎの伝承者へ筆写して渡すことも明らかになった。このように演者の研究は鷗外の作品としての史伝「渋江抽斎」の研究の外に、藩医としての渋江抽斎を巡る幕末の弘前藩の医学史に及んでいる。

2. 森鷗外の北海道・東北への旅

鷗外は東北・北海道へ2回旅をしている。いずれも公的な旅行であった。第一回目は明治15年9月27日から11月6日にかけて函館、青森、仙台、福島、新潟、高崎を旅したもので、東部検閲監軍部長である陸軍中將三好重臣の属員として徴兵の業務に従事した。この時の鷗外の日誌が「後北游日乗」である。

9月28日横浜から兵庫丸で出航し函館に向かった。30日に函館に入港し、公務の傍ら蓬萊町、五稜郭、公園、博物館、谷地頭温泉などを見学している。公務を終えて10月3日午前9時に函館を発って青森に向かったが、乗船したのは「浪花丸」であった。船内で次ぎのような漢詩を作った。

旅況如今忙亦甚⁹⁾

旅況はいま 忙なること甚だし

汽機輾轉不因風

汽機の輾轉 風に因らず

函湾一幅好図画

函湾は一幅 好図画なり

乍落遠烟空翠中

乍ち遠烟空翠の中に落つ

「汽機の輾轉 風に因らず」を安川氏は「船の車輪はくるくる回り、バシャバシャ水かき 風要らず」¹⁰⁾と現代日本語に巧に訳している。このように訳するためには「浪花丸」が外車船でなければならない。「外車船」とは外輪船のことである。演者が調査したところ、「浪花丸」は1863年に英国グラスゴーで製造された250総トンの船であったが、「三菱社史」には「外車蒸気船」¹¹⁾、「日本郵船船舶百年史」には「鉄製暗車蒸気船」¹²⁾とある。「暗車」とは「スクリュウ」のことである。このように推進方式については両書で齟齬が認められ、必ずしも外車船と断定出来ない。また写真も残されていない。したがって安川氏が「船の車輪はくるくる回り、バシャバシャ水かき 風要らず」と現代日本語に訳している根拠は未だ確定していないと思う¹³⁾。

当時函館・青森間は連絡船で7時間を要していた。10月3日午後4時青森に着いた鷗外は次ぎのような漢詩を作った。

火後寒郷転寂寥⁹⁾

火後の寒郷 転た寂寥

今宵始覚故園遥

今宵始めて覚ゆ 故園の遥かなることを

雙親此際眠安否

雙親此の際 眠りの安らかなるや

兒也天涯臥聽潮

兒はまた天涯に臥して 潮を聴く

この漢詩中野「火後」という言葉に関して小島憲之氏は「言葉の重み—鷗外のなぞを解く漢語—」の「第三『繁華』 青森の花柳の巷はいつ焼けたか」¹⁴⁾で次ぎのように述べている。

「火後」をそのような意に解釈する限り、明治十五年十月三日以前の比較的近い時期に、青森の港町に火事がなかったとすると、少々具合が悪いことになりそうである。

編集担当者を通じて青森市消防本部に尋ねたところ、その数日前の九月三十日、近くの塩町に二百棟近くを焼く大火があったとのことである。翌月三日午後ここに到着した鷗外は、街上市を往来する娼婦のむれを見下ろしながら、その向うに黒々と残る焼け跡を見たのである。そこで彼は、「火後、ただでさえ寒さむしいこの里は愈々寂しい」と、先ず歌ったのであった。

当時青森では未だ「東奥日報」など新聞が発刊されていなかったもので、地元の新聞などは参照することは出来ない。そこで函館新聞を調べてみると、9月30日には大火はなく、29日と10月1日の二度にわたって青森に大火があったことが判明した¹⁵⁾。二度大火があったことは鷗外たちが宿泊した「滝屋」の主人伊藤裕之の備忘録で傍証される。そうすると鷗外が主として見た大火は10月1日の方であった可能性が高い。鷗外が宿泊した旅館から直線的に眺められる現場は10月1日の火事であった。もちろん鷗外の意味する火事が両者であった可能性を全く否定するものではない。なお「後北游日乗」に鷗外は「鶴屋」に宿泊したと記しているが、これは鷗外の誤記であり、宿泊したのは「滝屋」である。これは宿帳の記載から実証される¹⁶⁾。

大正3年鷗外は陸軍軍医総監として衛戍病院巡視のため北海道、東北地方に出張した。二回目の北海道、東北地方の旅であった。その時の日記が「北遊記」である。5月9日夕刻に札幌に到着し、翌日月寒の病院を視察し、11日早朝札幌を出発して正午に旭川に到着。偕行社に宿泊した。12日に歩兵第28連隊、13日に衛戍病院(現独立行政法人国立病院機構道北病院)を視察して、午後4時過ぎ旭川を出発した。

「北遊記」には「正午旭川に至る。偕行社に投ず。夜書数十幅を作る。」¹⁷⁾とあるが、北海タイムズ(5月12日)には師団差し廻しの「馬車」で偕行社に向かったとある。この馬車は旭川駅から物資輸送のため第七師団まで敷設されていた「鉄道馬車」¹⁸⁾のことであったと推察される。師団司令部前が停留場になっており、その直ぐ奥が偕行社

であった。乗り心地の悪い通常の馬車で行ったのではなかったと考えられる。

鷗外は旭川で衛戍病院などを視察したが、その外に近文のアイヌ部落を訪問していたことはこれまで殆ど知られていない。最近の研究で鷗外がアイヌの小学校である「上川第五尋常小学校」を訪問したことが報告¹⁹⁾されたが、鷗外は小学校のみを訪問したのではなく、近文のアイヌ部落全体を訪問したのである²⁰⁾。

以上述べてきたように、演者の鷗外研究は大別して二つあり、一つは史伝「渋江抽斎」を中心とする津軽の医学史研究であり、もう一つは鷗外の旅行記「後北游日乗」、「北遊記」の考証的研究である。研究のため地元の資料を長年に渉って発掘精査しなければならず、解決するまでに長期間を要することが多い。

参考文献

- 1) 松木明. 渋江抽斎(孔版). 弘前: 私家版; 1967
- 2) 松木明. 渋江抽斎. 弘前: 津軽書房; 1981
- 3) 森鷗外. 渋江抽斎(岩波文庫, 改版). 東京: 岩波書店; 1999. p. 167
- 4) 松木明知編著. 渋江抽斎の研究. 東京: 岩波ブックサービスセンター; 1985
- 5) 松木明知編. 直舎伝記抄. 東京: 岩波ブックサービスセンター; 1985
- 6) 松木明知編. 森鷗外「渋江抽斎」基礎資料. 東京: 岩波ブックサービスセンター; 1988
- 7) 松木明知. 「渋江抽斎」の研究(一)—抽斎遺族の帰郷の経路について—. 鷗外 1991; 48: 1-12
- 8) 松木明知・花田要一編. 津軽医事文化史料集成(続). 東京: 岩波ブックサービスセンター; 1988. p. 235-241
- 9) 森鷗外. 鷗外全集(第35巻). 東京: 岩波書店; 1975. p. 67
- 10) 安川里香子. 『後北游日乗』の足跡と漢詩—青森—. 鷗外 2007; 80: 13
- 11) 三菱社誌刊行会. 三菱社誌(第二巻). 東京: 東京大学出版会; 1979. p. 251-252
- 12) 財団法人日本経営史研究所編. 日本郵船百年史資料. 東京: 日本郵船株式会社; 1988. p. 660
- 13) 松木明知. 森鷗外の「後北游日乗」, 「北遊記」に関連して—安川氏の論文を読んで—. 鷗外 2008; 83: 1-5
- 14) 小島憲之. ことばの重み—鷗外の謎を解く漢語—(新潮選書). 東京: 新潮社; 1984. p. 61-80

- 15) 松木明知. 鷗外の「後北游日乗」と青森(一)―青森の大火はいつか―. 鷗外 1988; 43: 173-177
- 16) 松木明知. 鷗外の「後北游日乗」と青森(二)―「鶴屋」か「滝屋」か―. 鷗外 1989; 44: 109-112
- 17) 森鷗外. 鷗外全集(第26巻). 東京: 岩波書店; 1973. p. 481
- 18) 松木明知. 森鷗外の「後北游日乗」, 「北遊記」に関連して. 鷗外 2008; 82: 97-109
- 19) 山崎一穎. 資料紹介(一) 鷗外日記の空白を補綴―アイヌの小学校訪問―. 鷗外 2008; 82: 247-251
- 20) 文献 18 p. 106-107